

創造性を育む空間 —神戸のワークプレイス探訪—

本連載vol.5では、「空間資源としての古ビル —神戸と横浜の事例から考える—」と題し、神戸と横浜都心部に位置する築年数の古い低廉なビルが、創造産業(アーティストやクリエイター・起業家等の新たな価値や文化を創造する業種)の居場所となり、個性的な界限の創出に繋がっているのではないかと、この考えを述べました。創造都市政策を推進する横浜市では、そのような寛容さや多様性を尊重するコミュニティを創造界限と定義し、経済活動の活性化だけでなくイノベーションの創出やこれからのまちづくり手法として注目しています。

一方、神戸市ではデザイン・クリエイティブセンター神戸や新開地アートひろば(旧・神戸アートビレッジセンター)等による創造的な活動支援の他、近年ではデザインや広告、IT等の情報サービス分野を都市型創造産業と定義し、創造産業の集積や地域振興に取り組んでいます。このことから、創造産業への期待が高まっていると考えることができます。また、これらの産業は時間や場所に捉われず知的な創造活動が行える産業として、都

心部のコワーキングスペースの増加と共に注目されています。

今号ではそのような背景から、イノベーションや地域交流が期待される場として、創造界限の活動拠点における多用途で様々な人々に使われる“自由な仕事場”をワークプレイスと定義し、筆者が訪れた神戸の拠点を振り返りながら考えてみたいと思います。

まずは、神戸元町商店街の中央に位置する神戸まちづくり会館内にある「まち活拠点 まちラボ」(以下、まちラボに略)です。みなと元町タウンニュースを愛読している方々はよくご存知のことと思いますが、神戸まちづくり会館は1993年11月にオープンしたまちづくり活動の支援拠点です。2019年4月より大規模改修が行われ、現在は1Fに神戸元町みなと書店、4Fにまちラボ、5Fにワークスペースが設置されています。改修前は貸室・ギャラリー・図書室などが中心でありましたが、現在は用途が多様化し、周辺住民の新たな需要に答えていると感じられます。

4Fのまちラボは、ワークスペースはもちろんのこと、書棚やカフェ、ミーティングスパー

ス等が緩やかに仕切られており、適度に感じられる人気居心地良く、図書館とは一味違う空間となっています。集中して作業に打ち込める場所とオープンに気軽に雑談ができる場所があり、関わり方の多様性を生み出していることが熟慮されておりました。また、まちづくりの専門家や職員による様々な企画が催されており、それに参加されている方々や職員さんからは、地域への誇りや愛着のようなものも感じられたことが印象的でした。

次は、デザイン・クリエイティブセンター神戸(以下、KIITOに略)内のIFにあるクリエイティブラウンジです。KIITOは旧神戸市立生糸検査所と旧国立生糸検査所の跡地を利用した2012年8月にオープンした創造界限拠点です。地上4階建ての建物内にはデザインやアートに関係するスペース、検査所時代の歴史展示などがあります。2022年6月には神戸市勤労会館の閉館に伴い、2027年に完成する再開発ビルに移転するまでの期間限定で同年7月から2FにKIITO三宮図書館が開設されています。

クリエイティブラウンジは3FのKIITO:300と共に2021年9月に整備されています。図書館移転を想定した計画となっており、デザイ



まちラボ(神戸まちづくり会館)

ンやアート関係者以外の利用者も見込まれ、つながりの広がり意識した拠点となっています。クリエイティブラウンジは元々、荷捌き場を改装したギャラリーでしたが、木材を使用した長テーブル、椅子やソファなどの家具が置かれた休憩スペース、ミーティングスペースなどが配置され、作業空間としての充実だけでなく、3Fの利用者や4Fの事務所関係者なども利用することを想定した計画となっており、利用していると建物全体が有機的につながる気配を感じ取ることができます。三宮の中心部からKIITOまでは歩くことと多少の距離がありますが、東遊園地の整備も含め、認知度の向上が期待され、より注目度が高まっています。

最後は、2023年4月にオープンした神戸有数の水道筋商店街近くにある「Incubation studio SoWeLu」です。2つの古い建物を繋げてリノベーションした拠点で、建物内にはコワーキングスペースの他、シェアキッチン、ギ

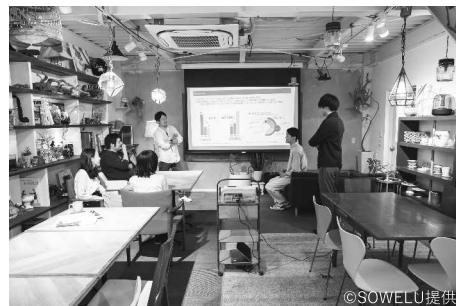


クリエイティブラウンジ(KIITO)

ャラリー、イベントスペースなどが混在しています。全体的にインテリア・小物雑貨・植栽が適所配置されており、暮らしを楽しむ精神性が感じられます。空間は主にコワーキングスペースの南館、シェアキッチンとギャラリーのある北館に緩やかに分かれており、来訪者を混在するのではなく用途に応じたゾーニングが印象的でした。

イベントスペースに併設されたシェアキッチンはコワーキングスペースの利用者や地域の関係者などが利用しており、つながりを生む仕組みが日常的生活の中に組み込まれていると感じました。また、施設内には、まちづくりや起業支援、地域連携を得意とするインキュベーターが在任しており、王子公園や水道筋商店街を中心とした創造性の育成やイノベーションの推進において重要な貢献を果たしていると感じられます。

これらの事例から、神戸のワークプレイスは、それぞれの立地やコンセプト、運営団体



イベントスペース(Incubation studio SoWeLu)

によって異なる特色を持ち、歴史的建造物を改装した独特の雰囲気、商店街内のまちづくり拠点、古ビルを活用したカフェを併設したリラックスできる空間など、多様な仕事場となっていることが確認されました。また、これらのワークプレイスは、多様な人材と交流できる空間を有することで、創造産業のスタートアップやベンチャーをインキュベーションする仕組みに貢献しているのではないかと考えることができます。

今回は誌面の都合上、話題はここまでとなりますが、今後も神戸のワークプレイス探訪は続けていきたいと思っておりますので、また機会があれば報告させていただきます。



鈴木 亮太 (すずき りょうた)

神戸松蔭女子学院大学 人間科学部
ファッション・ハウジングデザイン学科
講師/横浜国立大学大学院 都市社会
文化研究科 博士後期課程/専攻分野
空間デザイン・創造都市論